

## “THE MASK IS THE FACE”

山口 哲生

『ドリアン・グレイの肖像』におけるバジルとヘンリー卿は、ともにドリアンの生みの親である。彼らとドリアンとの関係は、作家とその作家が製作中の作品との関係に等しい。作家の内面にはバジルの要素とヘンリー卿的要素が拮抗しているのである。

ヘンリー卿はドリアンの美しさに尋常ならざる魅力を感じつつも、観察者たる態度を崩さない。ドリアンがシビルに熱狂的な恋をしても嫉妬もしなければ怒りもせず、ますます興味深く観察する。一方バジルは、ドリアンをヘンリー卿に横取りされはしないかと思っ

て嫉妬するし、シビルとの恋を知れば祝福の言葉を口にしながらうなだれる。彼はドリアンを観察対象として楽しむのではなく、ナマの感情をもって愛してしまったがゆえに、作品たるドリアンに殺されてしまった。彼の死は表現できなくなった表現者の死である。

ワイルドが作家の内面をヘンリー卿とバジルという二人の人物に二分して描いているのにたいして、三島由紀夫は『禁色』において、檜俊輔というひとりの作家の中に〈ヘンリー卿〉と〈バジル〉を共存させている。『禁色』においてドリアンに相等する人物は南悠一である。俊輔にとっては作品の素材であり彼に操られる虚構の存在であるべきはずの悠一が、男色社会の寵児となって屈強な外人の砂金の胸毛の下で花文字のように絡み合うのを想像して、彼は苦悶する。苦悶するとは、対象に肉感を感じはじめた証拠である。肉感という自然な感情に支配されると観察者の客観性は薄れ、表現は不可能になる。表現できないことは作家にとって死である。そこで俊輔はこの肉感の危険を克服するために現実の悠一から意志的に離れて、虚構の悠一を創造する。俊輔はバジルの要素を切り捨てた。

ワイルドも三島も〈生活〉や〈自然〉を追放しようとした。しかし、ワイルドは言う“A mask tells us more than a face.”と。三島も言う「芸術家は顕はすために偽はり、社会人は隠すために偽はる」と。彼らは作品という仮面によって何を顕わしたかったのか。その答えはホフマンスタールが用意してくれている——「ワイルドは絶えず人生の脅威自身に感じていたのだった。絶えず悲壮な戦慄が彼を囲んでいた。そして絶えず彼は人生に向けて挑戦し、現実を侮辱していた。そして人生が暗闇から彼に飛びかかろうと身構えているのを感じていた」（富士川英郎訳）。三島が『獄中記』を評して、「芸術家が生活人に敗北する経過をかくもまざまざと描き出した作品は、類を見ない」とヘンリー卿的仮面のもとにさんざんこきおろすとき、実は彼は、人生や自然が何の様式もなくがさつに襲ってくることの恐怖を、生傷のように顕わしているとはいえないであろうか。スーザン・ソントグの言葉を借りれば、“The mask is the face.”ということである。（活水女子大学教授）